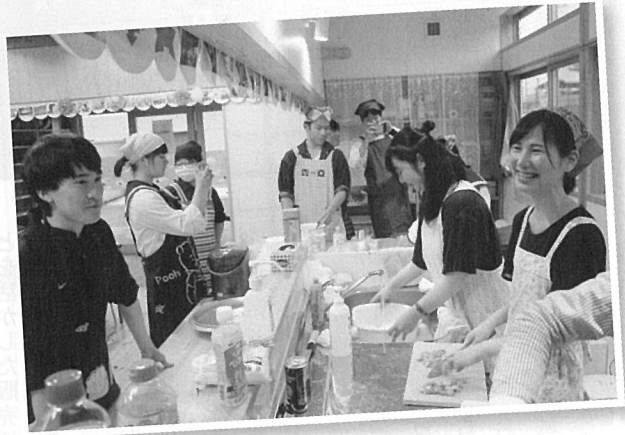


東日本大震災の 避難者支援活動

福島県大玉村 一般社団法人ちろる



学生が笑顔を決やらず調理



学生食堂開店までの準備中

東日本大震災及び福島第一原発事故による避難者が福島県二本松市には令和3年1月現在でも数多く、1000名以上が生活をしている。震災から9年が経過してようやく復興公営住宅内での避難者同士とのつながりはできてきたものの、復興公営住宅と民間借り上げ住宅、自己再建住宅と生活の場が違っていると避難者同士であっても横の連携は十分ではないし、避難先の二本松市の地元住民とのつながりに至ってはまだまだ不十分である。

そこで一般社団法人ちろるでは地元の福島県立安達高校や安達東高校の高校生や福島介護専門学校、福島大学災害ボランティアセンターの大学生とタッグを組んで、避

難者や地元住民に対して学生が食事を作って、一緒に食べて、交流をする「学生食堂」の活動を平成30年4月から実施している。

月に1回復興公営住宅表団地の集会所で、学校終了後に学生が集まって夕方から学生食堂がオープンする。復興公営住宅の集会所で実施しているのは安達高校や福島介護専門学校から近いという理由もあるのだが、地元住民や学生にとっては名目がないと復興公営住宅内に足を踏み入れる機会がない。しかしマスコミの報道ではなく、生の避難者の今の様子を知ってもらうためには、復興公営住宅内に実際に足を運んでもらい、生活の様子を直接目で見てもらい、肌で感じるのが一番である。

具体的な活動としては16時30分ぐらいから学生が集まり始めるので、今日何をやるのかを学生に説明する。避難者や地域住民が来るのが17時30分ぐらいからで、食事を始めるのが18時。それまでに学生は机やイスを並べたり、調理をしたり、避難者や大人の方とお話をする。18時から18時30分ぐらいまでが食事の時間で、その後は改めての自己紹介や近況報告等を含めた交流をする。

そして、ただ相互理解を図るだけの交流ではなく、避難者から東日本大震災が発生した時に何をしていたか、避難元市町村から避難所、仮設住宅、復興公営住宅等とどのように生活の拠点が変遷してきたのかを学生に話す時間を設

け、震災の記憶を風化させないための取り組みも行っている。

学生食堂が始まった当初の学生は指示をしても動けなかったり、避難者や地域の大人の方々と年齢が離れているためにどのように話したら良いのかも接したら良いのかも分からず、学生だけで固まっている姿が見られた。しかし活動を続けているうちに自分の親以上に年齢の離れた大人の参加者とも自然とコミュニケーションがとれるようになってきた。今では何を作るかを伝えると、自分たちで役割分担をして、会場の準備から調理、食べる時の座席の大人と学生の割合まで自分たちで調整するまでになり、主体性をもって活動に参加するまでになっている。



市内のお祭りに参加するため学生食堂参加者一同でよさこいを習う

る。さらには学生食堂には複数の学校や学年から多くの学生が集まるので学生食堂以外の部分でも勉強を教えてもらったり、進路について相談する場にもなっている。

昨年は専門学校の学生から「学生食堂に参加している方々と一緒に二本松市のお祭りですよさこい

踊りたい」との提案があった。専門学校の学生からよさこいの振付を教わり、地元の祭りに一緒に参加するといった学生食堂以外の文化活動での交流も生まれている。

避難者の方からは学生食堂が始まるまでは学生と街中ですれ違っても挨拶もなかったのだが、学生食堂で顔馴染みになった学生さんと街中で会った際に、学生から「おはようございます。この前はお世話になりました」と挨拶をしてきてくれたことが嬉しかった、と喜んでいる方もいる。世代を越えての挨拶や日常会話が生まれるのは、地域のコミュニティの活発化の第一歩である。

昨年度は新型コロナウイルスの影響もあり年9回の開催だったが、合計222名が学生食堂に参加してくれ、そのうち学生からは延べ91名の参加があった。

そのような毎月の積み重ねがあったので、避難者や地元住民にとっては他の地域よりもより一層学生を身近に感じ、学生にお世話になっているという思いが強い。新型コロナウイルスの影響で福島大学が休学し、学食も停止してしまい、学生が食に困っている、バイトもできず金銭的にも困窮しているとニュースが流れると、避難者同士で寄付を募って福島大学に届ける活動をしていた。互助の活動が生まれたのも学生食堂でのつながりがあり、お互いに顔も名前も分かる関係になっていたからである。



学生が作った食事を学生も避難者も地元住民も一緒になっていた

災害が発生した際に突然つながりが生まれるわけはなく、助け合いが起こるわけでもない。普段からの積み重ねがあるからこそ、有事の際にお互いに助け合おうという機運が高まる。そのため避難者と地元住民がまずは同じ地域で暮らす生活者としてつながり、その生活者と学生が世代を越えてつながる、そして日常的に関わりがあるから、声掛けも生まれるし、困った時の助け合いも生まれる。

そのようなつながりが生まれる学生食堂をこれからも学生はもちろん参加者とも協働で継続して、現在よりもより一層誰にとっても住みやすい地域にしていきたい。

(一般社団法人ちろる 鈴木哲也)